

「罰則化だけで事故は抑制できるか」などをテーマに話し合った日本てんかん協会主催のシンポジウム=東京都千代田区で



年70万件の事故中 てんかん発作は73件

強化したほか、運転者と一緒に酒を飲んだ同乗者や、運転者に酒を提供した人を直接罰する規定も新たに設けられた。

こうした一連の重罰化の効果はあったのか。高山弁護士は「飲酒運転への強烈な処罰は、ひき逃げの増加を生んだ。重く処罰されるのであれば、完全に逃げ切ろうという心理が働くわけだ。際限のない重罰化は、極論では死刑に行き着く。まことに、何らかの重罰化は、極論であるのではないか」と考える。

過去の重罰化も、今回てんかん患者団体や障害者団体は今回の罰則新設などの法案が「病気や障害のある人への差別を助長しかねない」と警戒感を募らせた。ただ、高山弁護士は「遺族も多様で、重罰化を求める遺族ばかりではない」と強調する。

「遺族の弁護も数多く手掛けてきたが、重罰化以外の方策を模索する人も少なくない。てんかん山弁護士は「飲酒運転への強烈な処罰は、ひき逃げの増加を生んだ。重く処罰されるのであれば、完全に逃げ切ろうという心理が働くわけだ。際限のない重罰化は、極論では死刑に行き着く。まことに、何らかの重罰化は、極論であるのではないか」と考える。

一方、てんかん患者団体や障害者団体は今回の罰則新設などの法案が「てんかんなどの病名を持つ尾上浩二事務局長は特定した規制は欠格条項の可否を判断する「相対的欠格事由」に改善された経緯がある。

障害者インター・ナショナル日本会議（DPI）の尾上浩二事務局長は、「てんかんなどの病名を持つ人の復活を思われる」と、困惑の表情を浮かべる。前出の大槻医師は「今回の道交法改正を事故防

飲酒罰則強化では「ひき逃げ増加」

てんかん患者の問題に限らず、厳罰化は社会の麻薬だ。これは犯罪の原因に目をつけさせ、情け容赦ない態度を人に強いる。情けは弱さの共有だから、自らの弱さを認めない冷徹さには酔つ。ところが麻薬ゆえ中毒になる。罰則だらけの息苦しさから、新たな厳罰で逃れようとする。無闇地獄である。(牧)

止につなげるには、患者が病状を正確に申告すれば速やかに免許は停止され、一方で生活が保護される仕組みが不可欠だ。運転する必要のない部署に配置転換した企業に補助金を出したり、自治体が患者への配車サービスをするなど知恵を絞つてほしい」と訴える。

高山弁護士は「ハーフ面からも事故防止を図るべきだ」と提案する。

「てんかん発作の兆を感知すると、車を動かなくする装置をつくることは十分可能なはずだ。実際、自動車メーカーが酒気帯び感知車両の開発に力を注いだ時期もあるたが、警察庁の消極的な姿勢が原因で立ち消えになつたようだ。警察は重罰化に凝り固まっているのではないか」

免許停止補う支援を

八月、罰則化や免許制度改正を求める請願書と約二十万人分の署名を法相に提出。政府は今年三月に道交法改正案、四月に死傷事故の新法案をそれぞれ閣議決定し、国会に提出した。

現行の道交法では、てんかんや統合失調症などの患者は免許取得や更新の際に申告が必要だ。てんかん患者の場合、発作が過去二年間起きていないなどの条件を満たせば、取得が認められる。

改正案では、病状の虚偽申告に、一年以下の懲役または三十万円以下の罰金を科す罰則を設け、医師による任意の通報制度も盛り込む。

死傷事故の新法案では、てんかんなどの病気による事故を初めて刑罰の対象とする。死亡事故で十五年以下、負傷事故で十二年以下の懲役

従来の危険運転致死傷罪（最高刑・懲役二年）は、悪質な事故でも飲酒などに限定され、立証のハードルも高いため、上限が懲役七年の自動車運転過失致死傷罪が適用されるケースが多くなった。このため、遺族の間で中間的な罪の必要性が叫ばれていた。

しかし、大槻医師は「鹿沼の事故」こそが、厳罰化によって生まれる事故の先取り的なケースではないか」と指摘する。

男性運転手は発作による物損や負傷事故を繰り返していたが、「いねり」と偽っていた。医師にも、発作や運転している事実を隠していた。警察に病気か発覚することを恐れたためだ。

「男性運転手は適切な治療を受ける」となく症状が悪化し、大惨事を起こした。罰則や医師による通報制度ができれば、医師にも発作があることを隠す患者が確実に増えるだろう。免許取り消しによる失職や生活の破綻の方が、デメリットが

てんかん患者の交通事故重罰化

てんかん患者が運転免許の取得や更新時に病状を隠したり、死傷事故を起こした場合に新たな罰則を科す法案が今国会に提出されている。てんかん発作事故の被害者遺族らが、厳罰化を強く望んでいることに応えた措置だ。しかし、専門家たちは「逆に患者が病状や運転状況を隠すようになる」と、その効果を疑問視する。飲酒運転対策をはじめ、重罰化一辺倒の交通事故防止策に死角はないのか。（佐藤圭）

鹿沼の小学生6人死亡「いねむり」と偽った末に



校中の小学生の列にクレーン車が突っ込んだ栃木県鹿沼市の事故現場。運転手のてかん発作が事故を招いた=2011年4月

「免許取り消しより失職が怖い」

八月、罰則化や免許制度改正を求める請願書と約二十万人分の署名を法相らに提出。政府は今年三月に道交法改正案、四月に死傷事故の新法案をそれぞれ閣議決定し、国会に提出した。

現行の道交法では、てんかんや統合失調症などの患者は免許取得や更新の際に申告が必要だ。てんかん患者の場合、発作が過去二年間起きていないなどの条件を満たせば、取得が認められる。

改正案では、病状の虚偽申告に、一年以下の懲役または三十万円以下の罰金を科す罰則を設け、医師による任意の通報制度も盛り込む。

死傷事故の新法案では、てんかんなどの病気による事故を初めて刑罰の対象とする。死亡事故で十五年以下、負傷事故で十二年以下の懲役

従来の危険運転致死傷罪（最高刑・懲役二年）は、悪質な事故でも飲酒などに限定され、立証のハードルも高いため、上限が懲役七年の自動車運転過失致死傷罪が適用されるケースが多くなった。このため、遺族との間で中間的な罪の必要性が叫ばれていた。

しかし、大槻医師は「鹿沼の事故」こそが、罰化によって生まれる事故の先取り的なケースではないかと指摘する。

男性運転手は発作による物損や負傷事故を繰り返していたが、「いねじり」と偽っていた。医師にも、発作や運転している事実を隠していた。警察に病気が発覚することを恐れたためだ。

「男性運転手は適切な治療を受けることなく状態が悪化し、大惨事を起こした。罰則や医師に